



あなたは定年後の人生をどう生きていきますか？定年後の生き方は人それぞれ、「これが正解」と言えるものはない。大切なことは「なにかをやってみよう」という前向きな思考を持つことだと小林清志（こばやし・きよし）さんは言う。歌うことがなによりも好きで、「定年後はボランティア活動を」と決めていた小林さんに体験談を聞いた。

前向き思考と「歌」の特技を活かしてボランティア活動で定年後を楽しむ

小林清志さん (68歳)



1940 (昭和 15) 年、立川市生まれ。55 歳で定年退職。再就職した会社で 60 歳を迎えたのを機に、40 年に及んだサラリーマン生活と決別。「なにか役に立てるのではないかと」を考え、ボランティアの世界に飛び込む。高校から始めた合唱や特技の工作技術を活かして、老人福祉施設や東児童館で喜ばれながら自らも楽しんでいる。

去る9月21日(日)、東児童館は子供たちの熱気につつまれていた。今年で9回目を迎えた「ふれあいキッズ祭り」が開幕したのだ。1階ロビーに設置された、縦4メートル横2メートルほどのジオラマの中を通勤電車や長距離列車、貨物列車などの精巧なミニチュアが走っている。子供たちは興味津々の眼差し。このジオラマを制作したのは、ボランティア活動で定年退職後の人生を楽しんでいる小林清志さんだ。

定年を目前に単身赴任

1991(平成3)年、空前の好景気が、突然、シャボン玉が弾けたかのように消滅した。金余りとまで言われた日本は不況のどん底に突き落とされ、企業の倒産が相次ぎ、サラリーマンはリストラの嵐に曝された。当時、計測機器メーカーに勤めていた小林清志さんもその一人だった。

52歳のある日、内勤業務から営業部門に配置転換、大阪へ単身赴任を命じられた。当時、会社の定年は55歳だった。定年を目前にしての配置転換、しかも単身赴任に若干戸惑ったが、暗さはなかった。「営業」ということで待遇はまだまだ

だよかった」からだ。自ら車を運んで西日本を担当。持ち前の前向き思考を發揮。慣れない営業の気疲れを訪れた各地の「社会科学」の面白さに置き換えて楽しんで。

60歳までは働く。その先は……

単身赴任4年目。55歳で会社を定年退職した。だが、隠居するにはまだ早い。60歳までは働くつもりだった。仕事探しに職安へ通い、ある都市銀行に囑託で採用された。4年余の銀行勤めで、「銀行の中のいいところ悪いところ、全部見せてもらった」という。60歳を機に銀行を退職。「すっぱりとサラリーマン人生を卒業」した。60歳を過ぎて働く気持ちはなかった。「仕事を終えたらボランティア」と考えていた。

ちょうどその頃、羽村市福祉センターで「送迎サービス」が始まった。介助を必要とする高齢者を病院へ送り迎えすることが主な仕事だった。40代の主婦、定年前のサラリーマン、定年を迎えた人など20人程がこのボランティアに応募。「謝礼も出るとのこと、こりゃあい

い(笑)」と小林さんも名乗りを上げた。真正正銘の定年後の新たな挑戦の始まりだった。

福祉ボランティアのむずかしさ

福祉センターが用意した3台の車を20人のボランティアが交代でハンドルを握った。依頼主を無事に自宅まで送り届けたときに「ありがとうございました」のことが嬉しく、充実したボランティアだった。

だが、4年を迎えて勇退した。病院からの帰り道、往々にして「ついでにここに行つて」「あつちに寄つて」と、さながらタクシードライバーのように求められることがあった。送迎という仕事の本領を超えるサービスを当然のように要求する利用者に反感を感じた。「自分にもわがままなところがある」と小林さんは言うが、さまざまな人と接する中で福祉ボランティアのむずかしさを知った。

一方で、若者との出会いもあった。センター職員の紹介でボーイスカウトが合唱で福祉施設を訪問する際の助っ人に誘われた。それが後の老人福祉施設でのボランティアにつながった。

外へ発信したくなって

福祉センターのボランティアを辞めた後、孫とのコミュニケーションのために鉄道模型の制作を始めた。ところが、徐々に子供が遊べるレベルではなくなり、孫も関心を示さなくなった。

そこで、小林さんは「外へボランティアの発信」を始めた。「こんなことをやっています」と自己PRのチラシを制作。いろいろなところへ文字通り「発信」した。近所の商店のご主人に配布の協力をお願いしたこともある。

自己PRが功を奏し、ある老人福祉施設のイベント担当者の目に留まり、書類審査を経て晴れてボランティアとなった。「まるで入社試験みたいだった(笑)。ただ熱意があるかどうかだけ」だったと振り返る。

楽しむことが継続の力

高校時代から合唱を続けている小林さんは根っからの歌好き。「普段のイベント会では必ず一曲歌わないと気がすまない」というほど。今春、半年に一度開催される「のど自慢大会」の審査委員長を依頼された。それまで審査委員長は特

別な人をお願いしていたが、「今回は都合がつかないので、小林さんお願いします」と。なにをどうしてよいのかもわからず戸惑いつつも、審査委員長の大役を無事に終えた。「何歳まで歌えるかわからないが、歌えなくなるまで続けたい。自分自身でも楽しく、面白くやっていることが継続の力だと思つ」と言う。

いま、小林さんは「人を頼りにしたボランティア仲間ではなく、自ら進んで行動できる仲間を作りたい」と思っている。自分だけが楽しむのではなく、いっしょに楽しむことができる仲間を。

最後に、定年を迎える世代へのアドバイスを尋ねると、即座に「やりたいと思つたら、即、実行してみる」と返ってきた。「現役時代には仕事で空想に終わることが、定年退職後にはできるのですよ。やりたいと思うことができる。失敗を恐れず、やれるところから始めてみる。そこからは始める」と前向きな姿勢の大切さを語ってくれた。「亭主が外に出ると家庭内の空気もよくなる」とも。さて、あなたは定年後の人生をどう生きていきますか？

「なにかやってみたい」「どんなことができるの？」etc. 『市民活動・ボランティアセンターはむら』が、さまざまなニーズにお応えします

6月28日(土)、羽村市コミュニティセンター2階に『市民活動・ボランティアセンターはむら』が開設されました。

同センター設立の目的は、羽村市内で活動する各種団体の情報収集、相互連携、市民への情報提供、市民活動の相談などを行い、羽村市の市民活動・ボランティア活動のなご一層の活性化を目指すことにあります。

市民の一人ひとりが持っている潜在的なヒューマンパワーを地域社会に提供していただき、住み良い「ふるさとむら」の新たな創造に参画していただくことを期待しています。

そのため『市民活動・ボランティアセンターはむら』の窓口あるいは情報コーナーでは、市民活動やボランティア活動に関するさまざまな情報をご案内しています。また、ボランティアの入門講座や講習会なども随時開催し、助成金の情報なども提供しています。

人と人を結びつけ、それぞれの持てる力を効果的に発揮し、暮らしやすい“まち”を市民のみなさんとともにつくっていく、そんなセンターを目指しています。「なにかやってみたい」と思っている方は一度訪ねてみてはいかがでしょうか。もちろん、電話での問合せもOKです。

Map showing the location of the Citizen Activity & Volunteer Center (はむら) at the 2nd floor of the Community Center, with surrounding landmarks like JR Yumoto Station and various schools.

市民活動・ボランティアセンター 〒205-0003 羽村市緑ヶ丘5-2-6 羽村市コミュニティセンター内 ☎042(578)5252 / FAX042(578)5253 開館時間 火～土曜日9:00～19:00 / 日曜日9:00～17:00 休館日 毎週月曜日及び祝日・年末年始